

泊りした。インディアンと一緒に暮らし、(インディアンとの)混血の家族を作ること多かつた。」

彼らは森の奥でわなを仕掛け、あるいは途中のインディアンから毛皮を仕入れて、一年か二年後にカナヌに毛皮を積んで町に戻ってきた。そこでバカ騒ぎをして稼ぎを使い果たすと、再び森の中へ消えて行った。

フランスがインディアンを味方に引き入れて、毛皮貿易を成功させるとともに、新大陸におけるフランスの領土を拡張できたのは、こうした森の男たちがいたからである。例えば、シャンプレーンの命令でミシガン湖に達したジャン・ニコレも、ハドソン湾の入江ジェームズ湾を探検したピエール・エスプリ・ラディソンも、五大湖地方とその奥地を探検したクロゼイエ卿、スベリオル湖北部を探検したタニエル・ドゥルーなども、森を駆ける男たちの仲間であった。

フランスの商人たちは、毛皮の取り引きに当って、インディアンをうまく利用した。

セント・ローレンス川一帯は、その頃、農業を営む好戦的なイロクオイ族インディアンに代わって、獣を追って放浪するアルゴンキン族やモンターネ族などが支配していた。これらの部族は、カルチエによる探検の頃からフランス人と友好を結んで、毛皮と鉄製の道具や武器を交換していたが、やがて毛皮貿易と引き換えに、彼らの仇敵イロクオイ族との戦いに、フランスの救援を求めてきた。

フランスにとって、セント・ローレンス川は毛皮の貿易に欠かせない要路であり、沿岸インディアンの協力はぜひとも必要であった。一方のイロクオイ族は現在のニューヨーク州北部に移動していても弱まっており、フランスにとって特に重要な存在ではなかった。フランスは、アルゴンキン族などの依頼をちゅうちょなく承諾した。

戦いはあつげなく終った。二百人のイロクオイ族に対して、「同盟軍」は六十人のインディアンに三人のフランス兵。ところが、フランス人がぶっ放した火縄銃にびっくりしたイロクオイ族は、戦う間もなく、クモの子を散らすように逃げて行ったのである。



開拓初期の毛皮取り引き風景

(NFB Photo)

これでフランスは同盟インディアンの確固たる協力を得て、安心して毛皮貿易に励むことができた。

しかし、イロクオイ族を敵に回したのは、大きな間違いだった。ニューヨークのオランダ人植民者と毛皮を取り引きして武器を得た彼らは、モントリオールやトロワ・リビエールのフランス人居住地をたびたび襲ったばかりか、一七五六―一七六三年の英仏戦争ではイギリスと組んでフランス軍に大損害を与えた。フランスが北米大陸から敗退したのは、そのためである。

ところで、毛皮商人はだんだん増えていったが、逆にビーバーは銃や鉄製の道具の使用により急速に減っていった。商人たちはできるだけ多くの毛皮を手に入れるために、ブランデーを持ち込む。その魅力にとりつかれたインディアンは、いよいよビーバーを乱獲するようになる。もちろん、酒がインディアン自身の生活に与えた影響も大きかった。

フランス植民地がイロクオイ族の攻撃を受けて徐々に弱まっていった一方で、ニュー・イングランド一帯を中心に植民していたイギリス人は、ケベックからアメリカ南部まで広がっていたフランスの包囲網をやぶるべく、勢力を伸ばしつつあった。

ちょうどその頃、イギリス側にとって全く都合なことが起こった。一六五九年にスベリオル湖を探検して毛皮を買い集めてきた二人のフランス人――クロゼイエ卿とその義弟ラディソン

が、毛皮商人の免許をもたない森を駆ける男たちであったために、その毛皮をニュー・フランス総督に取り上げられてしまった。そこで怒った二人は、フランス植民地を去り、ハドソン湾一帯でみた豊富な毛皮の話でイギリス側に持ち込んだのである。

その話は、一六六九年にクロゼイエがハドソン湾から船に満載してロンドンに持ち帰った毛皮の量によって証明された。その年の六月にハドソン湾における毛皮貿易の独占権を得ていた貴族と商人たちは、翌年五月、国王チャールズ二世から「ハドソン湾会社」設立の勅許状を手に入れる。

この勅許状により、ハドソン湾会社は当時まだ未踏の土地であった大平原一帯を含むラブラドル以西の広大な領域の管理を任せられることになった。

この一帯は、英国植民地とすることが宣言され、会社の初代総裁となったルバート公(チャールズ二世の従弟)の名をとって「ルバート領」と呼ばれることになった。

「ハドソン湾会社」は、ハドソン湾の沿岸周辺に駐屯所を設置し、インディア人が内陸から川伝いに運んで来た毛皮を買い取っては、英国に送っていた。会社は、当初から商業的に大成功を取めたただけでなく、その後百年にわたり、西部開拓に大きな役割を果たした。

こうして英国は、ハドソン湾一帯とニュー・イングランドを制し、北と南からニュー・フランスをはさむ形になった。